

『腰痛のマネジメント』 MANAGING LOW BACK PAIN (Second Edition)



Kirkaldy-Willis WH ed

富山医科薬科大学教授 辻陽雄 監訳

蓮江 光男／日本赤十字医療センター整形外科 医師

腰痛を主症状とする変性性腰椎疾患は、整形外科を中心とする日常臨床の common disease の一つであるが、その診療がつねに科学的根拠に基づいた、合理的かつ効果的なものであるとは、残念ながら断言できない。腰痛の発症機序には依然不明確な面が多く、その臨床の評価や効果的な治療手段についても、多くの問題点が残されている。国の内外を問わず、腰痛に関する学会や研究会がしばしば開催され、またこの方面の出版物が次々に出版される現状は、この間の事情をよく物語っている。

このほど辻陽雄教授により出版された、Kirkaldy-Willis WH 編者の「腰痛のマネジメント」第2版は、一読して他書と異なる特徴を有することがよくわかる。

第一に、腰痛患者に対しての包括的治療の重要性を強調していることである。個人の四つの側面(身体、知性、情緒、精神)に注目し、その環境との関係(趣味や興味、職場、社会活動、家庭や家族)に留意すべきであると述べているのは、

とかく局所病変に目を奪われがちなわれわれに、反省を促すものである。

第一は、病因がほぼ明らである疾患よりも、慢性腰痛患者についての記載に重点を置いていることである。圧倒的に患者数が多く対応がむしろ難しいだけに、妥当な選択と言えよう。

第三の特徴は、腰椎部の退行変性を三つの位相(初期機能不全、不安定期、安定期)に分類して、発症機序や治療法の選択と関連づけている点である。一人の患者をこの分類に従って診療することは、必ずしも可能ではなく、また適切でない場合もあるが、傾聴に値する考えかたである。

第四は、治療法の中で保存療法の記載に重点が置かれていることである。腰痛患者の大半は手術以外の方法で治療されてるだけに、われわれ整形外科医ももっとこの方面に関心をもつべきであり、創意工夫が要請される領域である。

最後にもっとも印象に残る点は、優秀なリーダーを中心とする

チーム医療の重要性を調強していることである。編集者をはじめとする多彩な著者たちが、彼等の実地臨床に基づいた考えかたを述べていることが、多方面での充実が要求されているわれわれにとって、きわめて示唆に富む内容である。

編集者の Kirkaldy-Willis WH は、1974年に報告された国際腰椎学会の、founding member の一人であり、高名な腰痛研究者である。一方、翻訳に当たられた富山医科薬科大学整形外科教室は、辻教授を中心に多年腰痛研究に取り組んでこられただけに、文章は格調高く流麗であるとともにわかりやすく、学識に基づいた行き届いた配慮が実感される。

このような編著者および監訳者によって上梓された本書は、前述した内容からもわかるように、整形外科医のみではなく、腰痛患者の診療に当る他科の医師やメディカルの方たちの、座右の書として好適であり、自信をもって推薦するしだいである。

(A B判, 352 ページ, 図 179, 写真 273, 定価 14420 円(税込), 送料 300 円, 1990 年, 医学書院刊)